大学日语专业高年级教材

にほんご

日语

（第七册）

陈生保
胡国伟 编
陈华浩

上海外语教育出版社

大学日语专业高年级教材

日　语

第七册

上海外国语学院日语系

陈生保

胡国伟　陈华浩

上海外语教育出版社

大学日语专业高年级教材
日　语
第　七　册
上海外国语学院日语系
陈　生　保
胡国伟　陈华浩　编

上海外语教育出版社出版
（上海外国語学院内）
国营泰兴印刷厂印装
新华书店上海发行所发行

787×1092 毫米 1/16　8.25 印张　160 千字
1987 年 8 月第 1 版　1987年 5 月第 1 次印刷
印数：1—5,000 册
统一书号：7218·256　定价：1.25 元

前言

随着中日关系日益密切，两国各方面的交流日趋频繁，我国学习日语的人数与日俱增。新中国成立以后，特别是近几年来，虽然已经出版了几种供日语专业低年级使用的教材，然而，高年级的教材却至今不见闻世。为了满足社会的需要，我们对在我系已使用过六、七轮的教材作了认真修改，现付印出版。

本教材是大学日语专业的高年级精读课教材，是我系所编日语基础课教材《日语》(一～四册，上海译文出版社出版)的续篇。全套教材共有四册(五～八册)，每学期学习一册，供三、四年级使用；同时也可供已具有日语基础的广大自学者作为进一步提高日语水平的教科书。

本教材的编写原则如下：

(一) 注意思想性。所选课文和编写的例句、练习，都注意能对学生有一定的启迪和教育作用。当然，这里所说的教育作用，是就广义而言的。它既包括热爱科学、献身祖国、诚实为人、珍惜友谊；也包括热爱自然、爱护动物、礼貌待人、尊敬师长等等。

(二) 注意实用性。我们主要选择反映今日日本的现代题材，尽量做到介绍客观，实事求是；在语言方面，则采用现代的规范语言，不仅要求正确、流畅，而且尽量做到生动、优美，以便使学生能学到地道的日语。

(三) 注意实践性。本教材注重培养学生的外语实践能力，希望学生的听、说、写、读、译五种能力全面提高。为此，我们在每课课文之后，都配备了形式多样，内容丰富的练习。

(四) 注意文章的趣味性和题材、体裁的多样性。本教材所选文章，内容上尽量做到活泼生动，饶有趣味；题材方面则有中日友好、日本的社会风貌、伦理道德、文化特色、语言文学、人物历史、自然风光等等；体裁方面，除了一般的记叙文之外，还有评论、随笔、抒情散文、游记、小说、诗歌、传记、讲演、剧本、回忆录、科普文章等等。在第七、第八册中，我们还选了一

些有关论述日本颇具代表性的几部古典作品的文章，以让学生阅读和欣赏这些作品的部分章节。

（五）注意既符合大学日语专业的要求，也照顾社会广大自学者的需要。为此，我们在生词和注释等方面力求详尽，所有难读汉字的字旁都注了读音。

（六）叙述文字全部使用日语，目的是为了培养学生用日语思维的能力。个别较难的地方附了汉语，以供参考。

我们希望使用本教材的教师采用「精讲多练」的教学法。本教材比之低年级基础课教材，不仅课文长度增加，而且语言难度和内容深度也有较大的提高，而上课时间则有所减少。为此，我们建议教师在学生充分预习的基础上，进行重点讲解，减少讲课时间，增加课堂练习时间。在练习的形式方面，可以采用问答、讨论、座谈、讲演等多种方式，并注意把口头和笔头、课内和课外有机地结合起来，使学生不仅彻底理解，而且能够熟练地掌握和应用。

我们希望使用本教材的学生不仅仅满足于读懂文章，而是循着理解——记忆——活用的学习规律，切实地提高听、说、写、读、译的五会能力，最终达到准确而熟练地表达思想的目的。为此，除了与低年级时一样，要重视课文的朗读和背诵之外，更需要养成自学和从事科研的习惯和能力，学会熟练地使用原文辞典和各种日文工具书。

在编写本教材过程中，利用和参考了日本几十家出版社所出的初、高中国语教材、教学资料和图书；同时也利用和参考了所能见到的国内出版的一些书刊杂志。教材的课文和课外读物部分都注明了出处，其他部分所引用的一些语言材料，由于引用的范围很广，涉及的文章、书刊甚多，并大多经过删节或改写，故不一一注明出处。

本教材由上海外国语学院日语系陈生保、胡国伟、陈华浩编写。陈生保担任主编，胡国伟任副主编。编写过程中，曾得到我校院系领导、各位同事以及外语教育出版社的大力支持，同时得到在我系任教的日本籍教师永野隆史先生的热情帮助，在此谨致谢忱。

这部教材的初稿始编于一九七八年秋，自一九七九年二月起在我院日语专业使用；也曾蒙复旦大学、华东

师范大学、上海大学、南京大学、杭州大学、四川外国语学院等兄弟院校的日语专业试用。在付印之前，编者根据我校使用的经验，也吸收了有关各方的意见，对原教材作了较大的修改。但由于编者水平有限，本教材的缺点和错误在所难免，敬请读者批评指正。

编　者

于一九八四年十二月

关于本册教材编辑体例的若干说明

本册教材供大学日语专业四年级上学期使用。全书共十课，每课由课文、注释、语言应用、指南与练习、课外读物等五个部分组成。每一课用多少学时，可视学生水平、课文长短和难易程度而定，不必强求一律。以我院日语系为例，每一课的上课时间平均约为八学时。

（一）课文——全部选用原作。凡出自外语教育需要对原文作过删节的，编者都在课文末尾作了说明。

（二）注释——对于课文的作者和课文中出现的重要的人物、事件、地名、书刊，以及其他一些难解的词语，均作简要的注释。

（三）语言应用——编者从课文中出现的新的语法、句型、词语中，选出值得举一反三，重点学习的条目，按出现的次序排列，并对它们的接续法、呼应关系以及使用方法进行说明。每条都附两个例句。

（四）指南与练习——编者就课文中较难的地方提了一些启发性的问题，以促使学生深入地理解课文；大部分则是围绕课文内容的问答练习，目的在于巩固和活用所学的语言和知识；也有少量是供学生思考和研究的题目。这部分的问题用口头还是笔头来做，可由教师按具体情况决定。

（五）课外读物——尽量选择与课文有联系的文章，这是为了在语言上起到复习、巩固和扩展的作用；在内容上对课文上有所补充，以利于扩大知识面。编者只对个别难读的汉字注了音，加了少量的注。

学完了第五、六册之后，学生已具有相当的日语水平。为了有利于培养学生独立思考、独立研究、独立解决问题的能力，在第七、八册的编辑体例上，有如下改变：单词的注释从简；例句减少到两个，并不再附汉译；原来的大部分练习形式已不再采用，代之以提了一些在内容上更具有深度和广度的思考和研究性问题。为此，希望学生充分地使用各种辞书和资料，养成更加自觉地学习的习惯。

目次

第一課　赤とんぼと油虫……1
注　釈
ことばの使い方
「なにしろ」
「ままならぬ」
「……へもってきて（……へ持ってきて）」
「精を出す」
「肩身が広い」
「うわのそら（上の空）」
「……そこなう」
「さすが（に）」
手引と練習
課外読物　わたしと飛行機
注　釈
第二課　映画芸術の成立……17
注　釈
ことばの使い方
「夢にも……ない」
「ついてまわる（付いて回る）」
「……余地がない」
「影をひそめる（影を潜める）」
「……を頼りに」
「おかまいなしに（お構いなしに）」
「一見……ようだ」
手引と練習
課外読物　「余暇」をすすめ
注　釈
第三課　無名の人……31
注　釈
ことばの使い方
「名状しがたい」
「かろうじて」
「身を寄せる」

「一命をとりとめる（一命を取り止める）」
「……ばこそ……」
「……ともなしに」
「程なく（ほどなく）」
手引と練習
課外読物　杜子春
注　釈
第四課　北海道の秋 ……43
注　釈
ことばの使い方
「ともすれば」
「割り切れる」
「ほかならぬ」
「ほど遠い」
手引と練習
課外読物　朝
注　釈
第五課　暗夜行路 ……52
注　釈
ことばの使い方
「……につけて」
「……のではない」
「案の定」
「度肝を抜く」
「……ざま」
「見るから（に）」
手引と練習
課外読物　前身（抜粋）
注　釈
第六課　日本人の契約観 ……66
注　釈
ことばの使い方
「いやいやながら」
「気を許す」
「信用が置ける」
「……に値する」
「大目に見る」
「……すべは（が・も）なし」
「次第」
手引と練習
課外読物　罪と恥

注　釈
第七課　伊良湖岬……81
注　釈
ことばの使い方
「さしも」
手引と練習
課外読物　能登の貝がら
注　釈
第八課　日本の耳……89
注　釈
ことばの使い方
「あんばい」
「……には……が」
「……極まる」
「……や否や」
「……至る」
手引と練習
課外読物　日本人の空間感覚
注　釈
第九課　俳句の鑑賞……101
注　釈
ことばの使い方
「とりもなおさず」
「骨を削る」
「目を背ける」
手引と練習
課外読物　俳句――世界で最も短い詩
注　釈
第十課　徒然草……111
注　釈
課外読物　作品と作者について
注　釈

第一課　赤とんぼと油虫

野坂昭如

昭和二十年、八月十五日

はるか南の、離れ小島。

夏の日ざしを受けて、白い輝く砂浜に、飛行機が一機いました。

いましたというと、まるでけだものでも、寝そべっているような感じですが、実際、この飛行機は、海をながめ、物思いにふけるみたい、とてもけだるい印象で、大空を颯爽と駆けめぐる姿など、想像しにくいのです。

小さな胴体に似合わぬ大きい二枚のプロペラ、ぶかっこうなエンジン、翼は二段になっていて、そこにくっきり日の丸が描かれています。

よく見ると、突き出した脚の一方が折れ、尾翼も片方がもぎ取れています。飛行機は四日前、この島の上にふらふらとやって来て、ほんとうに鳥が、羽を休める木の枝探すように、頼りなく旋回し、やがて思いきって砂浜に着陸したのです。

普通の飛行機なら、砂にめり込んで大破炎上したでしょうが、なにしろ初級練習機、子供までが「赤とんぼ」と呼んで、いささか軽蔑しながらも、親愛の情を抱いていた、玩具みたいなものだから、砂浜をかしぎつつとことこ走って、少し壊れただけで、ちゃんと止まりました。

操縦席から降りてきたのは、まだほんの子供といっていい少年航空兵でした。

少年は十八歳、海軍飛行予科練習生を卒えたばかり、まだ、機の操縦もままならず、そして、古ぼけた「赤とんぼ」ではあっても、当時の日本としては、これだけが頼りの、特攻隊員だったのです。

戦争が始まったばかりのころは、世界に誇る零戦を持ち、百戦練磨というか、鍛え抜かれた飛行士がたくさんいて、アメリカ、イギリスの飛行機を、ばたばた落としたのですが、十八年から、立場が逆になりました。

そして十九年、レイテ作戦で、ついに特別攻撃隊、つまり飛行機ごと敵艦に突っ込んで、これを沈めてしまおうという、戦法が現れ、新しい飛行機の生産がまにあわぬまま、ついには、まったく前世紀の遺物といっていい「赤とんぼ」まで、かり出される始末。

なにしろスピードがもともと遅いところへもってきて、重い爆弾を抱えているのですから、離陸するのがやっと。でも、事情を知らないアメリカ軍は、「赤とんぼ」を新兵器だと勘違いし

たそうです。

つまり、グラマン、P51やコルセアなど、零戦をしのぐ戦闘機が、よたよた飛んでる「赤とんぼ」を発見、餌食にしてやろうと襲いかかると、あっというまに通り過ぎてしまう。何倍もスピードが速いから、かえってねらいにくく、「日本は、空中に停止する飛行機を造り出した。」と、びっくりしたらしい。また「赤とんぼ」ではないけど、やはり古い飛行機が出撃したとき、アメリカの飛行士はこれと空中戦に入る前、しきりに「脚が出ている。」とゼスチュアで教えたといいます。

脚を格納し忘れている相手と戦ったのでは、フェアじゃないと考えたのでしょうが、これは、もともと固定脚で、引っ込めようがなかったのです。

話がそれましたが、とにかく少年兵は、これまで二度、特攻機に乗り込み、攻撃命令を受けて、海に敵を求めました。いずれも南の海上に敵の機動部隊がいると知らせが入って、出撃したのですが、スピードも遅ければ、航続力も短い「赤とんぼ」ですから、そのつど敵を発見できませんでした。

そのはじめての出撃に際して、部隊長は、少年と同じように若い隊員を前に、「おまえたちを愛し育ててくれたこの日本と、また母親、恋人を守るために、死ぬのだ。おまえたちだけを死なせはしない。あとに続く者あるを信じて、みごとに醜敵を撃滅してくれ。」と訓示しました。

日本を守ると言われても、少年はなんとなくとりとめない感じで、ぴんときませんでしたが、母親のためなら、よくわかります。

少年の母は、北国の街路で、小さな箱の上に野菜を並べ、雪の朝も、炎天の中でも、一日たりと休みませんでした。いったいいつ寝るのか不思議なほどで、造り酒屋の手伝いから、果物の取り入れ、夜なべ仕事に精を出し、またそうしなければ、早く父を亡くし、猫の額ほどの土地しかない身分では、少年を学校へはやれませんでした。

いかつく日焼けし、太い腕のお母さんでしたが、またとても優しい人でした。

「お袋を守るのか。」やがてエンジンがかけられ、とても轟々とはいかない、バランバランと心細いプロペラの響きを耳にして、少年は、目前に迫った死の恐怖はまったくなく、むしろにこにこ笑っていました。

これまで母親に、頼りきっていた、そりゃ予科練に進んだのは、自分の意志でしたが、何かにつけ強くて優しい、いつも自分を遠くから見ていてくれる絶対的な存在とお母さんを思い込んでいたのに、今は、自分が守ってあげることができる。

一人っ子の少年が戦死したとなれば、母は悲しみに狂うばかりとなるでしょうが、そのことは考えず、自分が守ってやる、ようやく恩返し、親孝行ができると、たいへんうれしくなり、これもまた、少年の甘えなのですが、それには気がつきません。

浮かび上がった「赤とんぼ」の操縦席でも、少年は、お母さんのことばかり考えていました。特攻隊員として、名誉の戦死をしたのだから、きっと肩身も広い、恩給だってつくし、もう、野菜を売らなくてすむ。にっこりほほえんだ自分の、りりしい写真姿をながめながら、お袋はきっと満足して暮らすに違いない。

囲炉裏にけぶる生木、その煙の吸い込まれていく藁屋根、雨や雪が近いときは、煙がこもって、涙ばかり出たし、寒いからと火を強くすれば、知らずに足の皮が焼けて、跡がつく。

少年は、とりとめなく昔のことを考え、エンジンの響きの中に、母親の声を、けっして空耳でなく聞き、そのあたたかいにおいを、かぎ分けました。

「赤とんぼ」は、三機の編隊を組み、パランパランと軽い音ながらエンジン快調、これで敵の姿を発見したら、逆落としで、少年も爆弾の部分品となり、ぶつかるなど、うそみたいに思えます。

海は、穏やかで、「赤とんぼ」の影をくっきり映し出し、もちろん釣り舟なんて、のんびりしたものは見えません。

やがて、洋上航法に慣れている先頭機が、機首を本土へもどし、少年の飛行機もならいます。これ以上進んで、もし、敵を発見できなかったら、むなしく海へ墜落しなければならない、今となっては「赤とんぼ」も貴重な戦力、むだにはできないのです。

もう二度と帰らぬつもりだった基地に、着陸したとたん、少年は、二時間ばかりの今の飛行が夢みたいに思え、母親を守るんだ。力みかえっていたのも、少し気恥ずかしいし、何より、あのまま敵を発見していたら、自分は確実に死んでいたと考えたとたん、膝ががくがくして、歯の根も合わぬほどの、恐怖感が生まれました。

その少年の心底見すかしたように、報告を受けた隊長は、「近ごろ、旺盛なる索敵精神の欠如が見られる。一日攻撃が遅れれば、それだけ敵の侵攻準備を整えさせるのだ。大義に殉ずる何より名誉な機会を、おろそかに思うな。」ふきげんに訓示しました。

別に自分が卑怯だったとか、臆病風に吹かれたとは思いませんが、なんとなくうわのそらで機を操縦していたのは事実です。

敵艦の姿求めるより、つい母親や、故郷の山、川のたたずまいを追って、言い方はおかしいけど、のんびりしてたように思う、少年は深く反省し、宿舎へ帰ろうと言すると、基地で働くほとんど同じ年ごろの労務者が二人、立ち話をしていて「特攻さんはいいよ、たらふく食って飲んで、毎日遊んでるんだもんなあ。」「こっちだって、死ぬにゃ変わりはないのになあ、本土決戦になりゃ、虫けらみたいにやられちまわあ。」その、ぼやきが耳に入りました。

確かに特攻隊員は、基地でも別扱い、食事もよかったし、自

由もありました。少年は、怒るより、今日生きて帰ったことが、なんとなく恥すかしくなり、お国のためや、母親を守るためというより、この食糧欠乏の日本にいて、毎日、卵やトマトや汁粉を食べさせてもらってるのだから、死ななきゃいけないんだと、自分自身を納得させました。

二回めの出撃のときが来て、もはや隊長は長く言わず、「成功を祈る、おまえたちの壮途を全国民が、いや、日本の歴史が見守っているぞ。」とだけ訓示し、見送り台の上に立ちました。

同じようにけだるい夏の日ざしを浴び、パランパランと「赤とんぼ」三機が南に向かい、少年は、いったい敵艦にぶつかる瞬間、痛いと感じるものかどうか、しきりに考えていました。痛いようでもあるし、その前に、気を失ってしまっているようにも思える。

先輩の話によると、まさしく夕立が逆しまに吹き上げるような、対空砲火の弾幕らしいけれど、そして高射機関砲の弾が当たると、零戦でも、翼がもぎ取られてしまうという。

ましてこんな小さな「赤とんぼ」では、どうなることか、当たったとき、何かショックがあるのだろうか、それとも空中分解して、気がつくと、空にたった一人でほうり出されていたりするのか。

だれだって死ぬんだ、しかもおれは名誉の戦死なんだ、お国のため、母親のため、醜敵撃滅護国の鬼となって、七生報国帝国の栄光のため、東洋の礎となるのだ。予科練のころから言い聞かされ続けた、教官のことばを何べんもよみがえらせましたが、なんだかそらぞらしくて、ただもうぶつかる瞬間、自分は何を考えるのだろう。よく、一生の出来事が走馬燈のごとく脳裏に浮かぶというけれど、そんなことがあるのかしら。

海はあいかわらず穏やかで、時おり慌てて四方に目を配りますが、何も見えません。雲量二、視界良好、そして少年の視力は二・〇もあるのに、ともすれば霞がかかったように、海に刻まれた波の紋様、雲の形がぼやけてしまいます。いや、実ははっきり見えているのですが、大空にぽっかり浮かんでいる自分がとりとめなく、上下の感じもあやしくなってきて、下に広がるのは海ではなく空なのではないか、今、ほんとうに南に向かっているのか、ほんとうはもう自分は死んじゃっていて、靖国神社へ帰るところなのじゃないか。

そしてまた先導機が合図し、「赤とんぼ」三機は、本土へともどり始めました、敵を発見できなかったのです。

今度は、少年はっきりおびえを感じ、みずから爆弾と化して五体四散する、その想像は、どうも突拍子もなさ過ぎて、かえって子守唄のように夢心地に誘ってくれたけれど、生還した自分を待ち受ける周囲の視線は、至極現実的です。「一度、突っ込みそこなったやつは、すっかりおじけづく。」「生きた神様が聞いてあきれる、あれで帝国海軍なのか。」ぶつぶつささやく声が聞こえ、少年だって、特攻機に搭乗する以前、出撃してはむなしくもどる先輩を、冷たく見たものでした。

「気にすることはない。」いつも先頭機に乗って、少年を誘導する二歳年長の男が、隊長へ報告を済ますともどって、「どっちみち、赤とんぼで突入しても、百のうち百たたき落とされる。今、日本にある最高の飛行機を使用したところで、確率は一割に満たないのだ。それでも万一の幸運をねらって、おれはじっくり機会を待つ、おれについてくればいいんだ。」慰めてくれました。

作業のいっさいを免除されていましたから、少年は、いつも藁布団の上に寝そべり、先輩の言うとおりなら、ただ死ぬために出撃するようなもの、いったいどう心を定めていいものか。お国のために死ぬといっても、ただ何発かの弾薬をアメリカに使わせるだけでは、いかにも情けない。

食欲もなくなり、また、お酒で憂さを晴らすには若すぎました。少年は、布団に紛れ込んだ油虫を、マッチ箱の中に入れ、そのつややかなはだの色をながめ、ゆらゆらうごめかす長いひげを、指で触れ、はじめ油虫を見つけたときは、飼うつもりなどなかったのですが、まだ幼くて、簡単につかまえてみると、殺すのもかわいそうで、パンくず、野菜を与え、すると愛着が生まれました。

今度、出撃するときはいっしょに連れていくつもり、油虫としゃべっていれば、少しは気が紛れるし、自分の最期を、見届けてもらいたいような気もします。

そして、三度めの命令が下され、「赤とんぼ」三機がまた南へ発進しました。少年は、飛行服のポケットにマッチ箱を入れ、一定の高度をとったあと、膝に油虫を放してやりました。

いつも狭い所に閉じこめられているせいか、あるいは、空高く飛ぶ飛行機の中でとまどったのか、油虫はしばらくじっとしたままで、少年が指でつっつくと、その指にはいのぼり、また身を固くして、ひげのみさまよわせます。

自分の死んだあとはどうなるのだろうか、きっとアメリカ軍は本土に上陸する、母親のいる北国まで、いっぺんに進むのだろう。基地周辺で見受ける日本陸軍、それは本土防衛隊というらしいのですが、ろくに鉄砲もなく、壕掘りか、でなければ竹槍訓練をしていました。

あんなもので勝てるわけはないと、少年にもよくわかります、日本人は皆殺しにされてしまうのか、母親も、サイパン、硫黄島、沖縄でそうだったように、火炎放射器で焼かれ、あるいはその前に自決するのか。

悲しい気持ちはなく、また、そうはさせじと気負い立つ心もなく、少年は、油虫のそろそろうごめく、むずかゆい感触を、むしろ楽しんでいました。

おまえだけが友達だ、そんな気がして、固くは見えても、触れるといかにもたわいないその背中をなで、「羽があるんだから、突入の直前に逃げ出せよ。」逃がしたところで、どうもなりはしませんが、道連れにするのもかわいそうだから、しゃべりかけ、すると急に、自分が連れてこなければ、今ごろはあの基

地で、自由に壁をはいずり回り、残飯を食べていられたのにと、残酷なことをしたと後悔が生まれました。

日本の人間がみんな殺されたって、油虫は生き残るだろう、日本の国に油虫がいっぱいになって、油虫の親子が楽しげに山や野原を、はいずり飛び回り、それでもいいような気がしました。

油虫のことばかり考えて、気がつくと、少年の飛行機は、いつしか編隊から離れ、たった一機、海と空の間にただよっていて、さすがにびっくりし、四方に目を凝らしましたが、僚機の姿も、もちろん敵艦も見えません。

いよいよ最期のときが来たと、はっきりわかります、先導機を見失うなんて、とんでもない話だし、また、行くにもどるにも、少年には方角がつかめません。燃料の続く限りパランパランと飛び続け、海に墜落するほかはない。

思いのほか、恐怖感はなく、どうせ犬死にするなら、せめて油虫を生かしてやりたい、小島でもあれば、不時着して、と、さらに目を凝らし、この島を発見したのです。

珊瑚のかけらが混じる砂浜は白く輝き、滑走路のように固い感じでしたから、懸命に少しでも広い場所を求めて、「赤とんぼ」を操り、危なっかしく着陸したのです。

少年は、油虫といっしょに機を降り、あまり強い陽光だから、油虫だけを操縦席にもどしてやりました。そして、ポケットから握り飯の残りと、航空チョコレートを出して、そのかたわらに置き、もっと餌になるものはないかと、砂浜のそばの林に入って、柔らかそうな木の葉や、雑草をむしり、油虫の好ききらいなどわかりませんが、これで少しは食いつなげるはず。

できるだけのことを済ませると、少年は裸となって、波打ち際に向け歩き出し、一度、振り返って「赤とんぼ」をながめました。「赤とんぼ」は、不器用なけだもののように、どっかと腰をすえ、少年は、「赤とんぼ」だって、炎に包まれながら空中分解するよりはよかったろうと思いました。それからあとは、まっすぐ沖へ泳ぎ出し、ふと、母親のいる北国はどっちの方角かと考えましたが、すぐ振り払い、ただ両手両足、大きく伸ばし、また、縮めて、ひたすら泳ぎ続けました。

八月十五日

南の島の、白い砂の上に、「赤とんぼ」が座り込み、そして、その操縦席に、つややかなはだの油虫が、長いひげゆらゆらさせながら、しみついている少年の体臭を懐かしむように、うずくまっていました。

（野坂昭如「戦争童話集」による）

注釈

一、筆者　野坂昭如

一九三〇年～　小説家。神奈川県の生まれ。早稲田大学仏文学科中退。主な作品に、小説「火垂るの墓」「アメリカひじき」「水虫魂」、随筆「風来めがね」などがある。

二、大破炎上する

めちゃくちゃにこわれて燃え上がる。

三、かしぐ（傾ぐ）

かたむく。

四、海軍飛行予科練習生

当時、日本海軍飛行兵となるための訓練を受けている少年兵。

五、特攻隊

特別攻撃隊の略。特に第二次世界大戦の末期、日本陸海軍の航空機・人間魚雷などによるアメリカ艦艇体当たり攻撃のために特に編成された部隊。

六、零戦

零式艦上戦闘機。一九三九年に製作された。

七、十八年

昭和十八年のこと。一九四三年。

八、レイテ作戦

一九四四年十月、フィリピンのレイテ湾（莱特湾）で、日米海軍が総力をあげた決戦。日本軍が敗退した。／莱特大战。

九、グラマン、P51やコルセア

いずれも第二次世界大戦中に活躍したアメリカ軍の戦闘機。

十、そのつど

そのたび。

十一、とりとめない（取り止めない）

取り止めが無いの略。要領を得ない。

十二、一日たりと休みません

一日も休みません。

十三、猫の額

土地や場所が非常にせまいことのたとえ。

十四、いかつい（厳つい）

やわらかみがなく、強そうな様子。

十五、轟々とはいかない

（エンジンの音が）轟々とはならない意。

十六、予科練